新しい専門委員会をつくろう

横井 秀俊*

学会活動には、最新の研究成果の公表と情報交換を促進する「場」、真理の探究を通してその分野の学術の発展を促進する「場」、社会に対して情報を発信し内外の関係諸団体との連絡や提携を促進する「場」など、様々な顔の「場」が提供されている。あるときは、年次大会などの学術講演会やセミナー、あるときは学会誌やテキストなどの刊行物を通して、これら縦糸と横糸とが織りなされて、多彩な学会活動が繰り広げられている。インターネットや情報メディアがこれほどまでに発達した今日にあっても、やはり学会活動の基本は人と人との交流にある。そこにこそ、生きた情報交流の場を提供するという、学会本来の使命があるであろう。

プラスチック成形加工学会では、年次大会の参加者数が、例年、個人会員数約1400人の5、6割を超え、また昨秋のシンポジア（京都）では5割に近づくほどの勢いを見せていた。これは、何とも尋常でない数字である。文字通り、生きた情報交流の場を存分に活かした学会活動を実践しているか（？）に見える。しかし、実は大半の会員は、この年次大会とシンポジア、その他の講演会等企画行事に参加する以外に、身を寄せる「場」を持っていないのが実情である。

学会の本来の活動基盤が、人と人との交流にあるとしたならば、互いの顔が判る小グループが、学会活動に相応しい多様な顔を掲げて学会内に数多く存在することは、多くの会員にとって非常に重要である。いわゆるサロンとしての機能で、同じ専門分野の研究者・技術者が集う専門委員会や、地域の特性を活かした支部の活動などがそれにあたる。残念なことに、本学会の専門委員会は、本特集号を担当する押出成形専門委員会を含めて現在6つ、支部は関西支部のみである。6つの専門委員会の総委員数は、全会員数の1割程度と何とも心もとない。例えば、精密工学会には29の分科会・専門委員会が、また塑性加工学会には18の分科会がある。学会の規模を勘案しても、やはり本学会の専門委員会数は少ないという印象が残る。それでは、本

学会には専門委員会のニーズは少ないか？といえ、学会内には潜在的に熱い要望がある。そのことを、筆者は、関係する専門委員会活動を通して強く感じ取っている。

一年半前に立ち上がった新加工技術専門委員会は、年4回、毎回2、3人の講師を招いて講演・質疑応答と簡単な交流会を行っている。どこにでもあるごく普通の定例会である。しかし、回を重ねるにつれて委員数は増え続け、現在66名までになっている。本来、討論時間が目玉であった本委員会も、委員数が増えて会場内で互いの顔や表情が見えにくくなると、最近、議論が低調になってきた。そこで試みに共通テーマを設定し、班別討論と総括の全体討論を企画したところ、参加人数も増え、各班とも異常な盛り上がりを見せることとなった。何しろ議論が止まらないのである。班別討論の場を毎回希望する声にも圧倒された。こうした想定外の盛り上がりを前にして、企画サイドも“どうなっているのだろうか？”とただ驚くばかりである。ここに、最新情報交流の場の提供（＝専門委員会本来の趣旨）にも増して、一人一人の顔が判り、議論に参加できる、自由に発言ができる場への委員諸氏のうずうずした渴望を、直接垣間見ることができる。以後は、班別討論を毎回試行することになったが、討論への渴望はとどまる所を知らず、次は“泊りがけ徹底討論を”という声が新たに広がりつつある。最後は一体どうなるのか、当事者としては嬉しい心配事？でもある。

学会活動の活性化には、学会の顔としての地道な専門委員会活動が不可欠である。専門の近い研究者・技術者が定期的に集うサブセットのホームグラウンドが、互いにひしめき合い重なり合う中で、学会の枠はどんどん押し広げられ、そして裾野が広がって行く。大学、公的研究機関の研究者が比較的少ない本学会では、専門委員会を担うコアメンバーの少なさがもともと課題であった。しかし、会員諸氏の強い要望が、新たな専門委員会設置への契機となることは間違いない。まずは、声を上げ、そして行動しよう。新しい専門委員会が次々に設立され、それらが重層的に発展して行く過程で、本学会がさらに新しいステージへと押し上げられることを切に願うものである。

次は、どんな専門委員会が設置されるか、楽しみである。

* Yokoi, Hidetoshi
東京大学 国際・産学共同研究センター
東京都目黒区駒場 4-6-1 (〒153-8904)
2005. 3. 21 受理